

仏教は自衛戦争、聖戦論をどう考える

第51回龍谷教学会議・シンポで熱論

宗門の研究者が意見交換を行う龍谷教学会議（会長＝徳永一道勸学寮頭）の第51回大会が先ごろ、「浄土真宗と平和」をテーマに京都市下京区の龍谷大学大宮学舎で開かれた。

安全保障関連法案が国会で議論されるなど平和への関心が高まっています。平和について問い直そうと開かれたシンポジウムには、政治哲学者として「公共性」を研究する千葉大学大学院の小林正弥教授、キリスト教神学を基礎に現代世界における「良心」を考察しその

小原教授が「聖書は一切の暴力を否定している。しかし後のキリスト教では必要悪として正戦を認めていくようになる。『正戦論の父』といわれる神学者・アウグスティヌスは、『目の前で、愛する隣人が殺されようとして、戦争反対と見過ごすのかという』と肯定しており、現在のアメリカなどはこの論理」と解説。また、「キリスト教は本

し、宗教者というのは、それくらい絶対平和主義の立場に立つべき」と主張した。

それを受け内藤司教は、「大乘仏教の仏典には菩薩が、虐げられ、苦しめられている人を助け、殺すために人の命を奪ってしまうことが出てくる。しかしその殺人を決して正しいとは言わず、殺人の果報に必ず地獄に落ちる」と説き、否定して「この菩薩の殺人を肯定し、悪用したの頬を差し出さない」ということであるが、殺人や戦争を肯定すればそれは仏教では逸脱している。しかし」と説明した。